



開催日：平成26年月11月23日(日・祝)

会場：前橋テルサ4階 第3研修室

群馬詩人クラブ

会報

No. 289

編集／群馬詩人クラブ幹事会

代表／平野秀哉

発行／群馬詩人クラブ事務局

〒370-3102

高崎市箕郷町生原1730

龍昌寺

印刷 三協印刷

振替番号 00140-8-728969 狩野務

主な記事

- 会計報告書・予算書 …………… 2
- 「高崎現代詩の会」の歩み
田口三船………… 3
- 関係者の皆様へ ―中間報告―
木村和夫………… 4
- 詩に託したもの 追悼―くぼたこうじさん
富沢 智………… 5
- 詩集評…………… 6
富沢 智詩集『乳茸狩り』堤 美代
斎藤守弘詩集『戦争放棄』磯貝優子
- イベント報告
「裳」―耳で味わう詩― 相乗り朗読会を終えて
須田芳枝 …… 7
- 群馬年刊詩集第37集 販売のご案内 …… 8
- 受贈詩誌御礼／編集後記 …………… 8

◆ 日 程 ◆

受付 午後一時三〇分より

第一部 総会 (二時～二時三〇分)

議長選出

代表幹事挨拶

1号議案 平成二六年度事業報告

2号議案 平成二六年度会計報告

同監査報告

質疑応答

3号議案 平成二七年度事業計画案

4号議案 平成二七年度予算案

質疑応答

第二部 秋の詩祭 (二時四〇分～四時)

演題「今 詩は」

講師 三浦雅士氏

〈略歴〉

一九四六年 二月弘前市生まれ。

文芸評論家、日本芸術院会員。

一九七二年 「ユリイカ」編集長。

一九七五年 「現代思想」編集長。

一九八四年 「メランコリーの水脈」で

サントリイ学芸賞受賞。

一九九一年 「ダンスマガジン」編集長。

一九九六年 「身体の零度」で読売文学賞受賞。

二〇〇二年 「青春の終焉」で伊藤整文学賞、

芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

二〇一〇年 紫綬褒章受章。

二〇一二年 『出生の秘密』その他の業績で

日本芸術院賞・恩賜賞受賞。

萩原朔太郎研究会会長。

第三部 懇親会 (四時～)

会場 前橋テルサ一階「オルヴィエターナ」

会費 四〇〇〇円

★当日「群馬年刊詩集第三七集」を配布します。

★この会報は総会の資料として使用しますので、当日ご持参ください。

★受付にて会費納入を受け付けます。年会費

は三千円です。

群馬詩人クラブ 平成26年度会計報告書・平成27年度会計予算書

平成26年度会計報告書

(平成25年10月6日～平成26年10月6日)

平成27年度会計予算書(案)

(平成26年10月7日～平成27年10月6日)

●収入 670,407

(単位:円)

繰越金	259,407	(引継金額) 259,407 (会計) 416,477
会費収入	371,000	会員121名
日本現代詩人会	40,000	
雑収入	0	
計	670,407	

●収入 671,450

(単位:円)

329,450	繰越金
342,000	3,000円×会員114名
0	
0	
671,450	収入計

●支出 340,957

(単位:円)

会報印刷費 (名簿含む)	158,201	284号～288号
通信費	57,668	
秋の詩祭	40,000	講師謝礼ほか
会議費	30,000	幹事活動費 3,000円×10人
年刊詩集補助	0	
現代詩作品展	33,044	ハガキほか
総会関係費	5,670	テルサ会場費
弔電	0	
諸雑費	16,374	封筒、ラベルシートほか
予備費	0	
計	340,957	

●支出 671,450

(単位:円)

158,000	289号～293号
58,000	
40,000	講師謝礼ほか
30,000	幹事活動費 3,000円×10人
0	
35,000	ハガキほか
5,600	テルサ会場費
3,000	
17,000	封筒、ラベルシートほか
324,850	
671,450	

収入合計 670,407円 - 支出合計 340,957円 = 差引残高 329,450円

次年度繰越金 329,450円

「高崎現代詩の会」の歩み

田口三船

「高崎現代詩の会」が発足したのは一九九二年十一月二十二日、ざっと二十二年前のことである。この日、J.R健康保険センター会議室で、平方秀夫さんや馬場映兒さんをはじめとする十名の各氏を発起人として設立総会が開催され、第一歩が踏み出された。

会誌「Scramble」創刊号の巻頭で会長の平方秀夫氏は「この会が発足し、高崎に現代詩の会を設立してよかった、と思うことが次々にわかって来た。」と書き、高崎における先達詩人 岡田刀水士・豊田一男・柴田茂・梁田ばく氏達の詩的偉業を確認し合い、とかく散り散りになりがちな詩の仲間達との話し合いの場ができたことなどをあげて大きな期待を寄せている。

創立当時から徐々に会員数も増えて、翌一九九三年三月末には三十一名となっている。大きな特色として、特定の主義主張や傾向にこだわることなく、誰もが自由に参加できること、長い詩歴を持つ会員に混じって今まであまり詩に関心を持たなかった人たちが、書き始めて日の浅い人たちが多数仲間として加わったことなどが挙げられよう。

会則第二条では、「現代詩に係る行事と会誌などを通じ、高崎市の詩人の交流と活動の拠点となるとともに、会員の詩作の向上と相互の親睦をはかり、高崎市の文化の発展に寄

与すること」を目的としている。第三条では、「詩作を主とする文芸を愛好し、高崎市に住、もしくは在勤する者、市内の詩グループに所属する者、及び会長が幹事会に諮り承認した者」と規定している。ここでも見られるとおり、一応の対象は高崎市域としているが、これは地域を限定するものではなく、高崎市を中心とした生活の基盤となるそれぞれの地域、として共通理解しているところである。

会誌が創刊されたのは設立総会から一か月後の一九九二年十二月二十二日。この十月で百三十二号を数え、創立当初より隔月刊として欠号することなく現在に至っている。スクランブルとは、交差点で人と車を完全に分離して、歩行者の安全を確保するためのものであり、そこは、多方向から進入してくる人たちの出会いの場でもある。そうした思いを込めて、会員による巻頭言、テーマを掲げての特集記事、書評、紹介連絡記事等、時には県内外の会員外の方にも執筆もお願いし、多様な内容となっている。また会誌には、毎号会員作品欄を設けて発表の場としており、各方面から温かい感想などが寄せられている。

会誌発行に合わせて、これも創刊当時から欠かすことなく実施されている例会は、会員はもろろん詩に関心を持つ会員外の方々にも呼び掛け、掲載作品について率直な意見交換合評の場として定着しているところである。

年六回の例会のうち、一回は詩の朗読会として実施しており、これも会員に限定するこ

となく広く呼び掛けて毎回多くの参加をいただき、明るく自由な雰囲気の中でそれぞれの個性をいかした朗読会が展開されている。

会誌「SCRAMBLE」(一五号より全て大文字)の発行、例会、朗読会と並んで「高崎現代詩の会」の主要事業として挙げられるものに、総会に続く現代詩ゼミがある。毎年四月、県内外から詩人を招いて、現代詩の核心に触れた話題を提供していただいている。

なお、節目ごとにすでに二回発行されている会員全員参加による「アンソロジー」も、この会にとつて忘れることのできない記念碑的の事業である。

こうした数々の事業を企画し実施する幹事会は、例会のない月に、つまり年六回開催されている。それぞれ分担を定め、会員の意向を受けながら、年間行事の策定、会誌編集、個々の事業、経理等、会の運営全般にわたって、話し合いを進めている。

ここまで「高崎現代詩の会」の歩みについて簡単に触れてきたが、最近幹事会等で話題になりつつある問題をあげてみると、最も多いのは、会員の減少と固定化。その他いろいろあるが、先ず解決策として考えなければならぬのは、魅力ある会にすること。そのためには、長年培ってきた「高崎現代詩の会」の原点を見つめながら、時代に即応した柔軟な考え方を大事にすると同時に、会員相互の活発な詩的交流を図ること、これに尽きると思われる。

関係者の皆様へ―中間報告―

木村和夫

私はいま、群馬の、そして前橋の子供たちに詩を作ってもらうための広報活動をしています。この群馬には萩原朔太郎という日本一偉い詩人がいて、その他にも大手拓次、平井晩村、山村暮鳥、萩原恭次郎、東官七男、横地正二郎、高橋元吉、岡田刀水士、伊藤信吉といった、日本を代表する個性豊かな優れた詩人たちがいました。これほど多くの優れた詩人たちが、同時代に一ヶ所に集まっている都市は、群馬県他に例がないことから、群馬は「詩の国」と言われ、そして前橋は「日本の詩人たちの聖地」のように言われました。その群馬で、その前橋で、いま詩を作っているのは中高年ばかりで、後継者となるべき三〇歳以下の青少年たちは、まったく詩を作っていないのです。このままの状態を放置しておきますと、朔太郎時代に築かれた、あの素晴らしい詩の世界が忘れ去られてしまうのではないかとという危機感から、私はパンフレット「朔太郎が愛した利根川を行く」を作って、青少年たちに詩を作ってもらおうと考えました。

心をもったところで、子供たちに詩は作れないと思いました。

前橋は「水と緑と詩のまち」と言われるようになってから、だいぶ時間が経ちましたが、朔太郎と詩に関心をもっている前橋市民は少数のように思いました。だからと云ってこのまま放っておきますと、「詩のまち前橋」で詩を作るものがいなくなります。それに、前橋以外の都市ならばともかく、詩のまち前橋でこのようなことがあつてはいけないと思いました。

私が七十六年間、前橋で暮らして解ったことは、前橋が日本中に誇れるものは、朔太郎と詩以外にはないということでした。したがって、詩は前橋の唯一の文学であり、文化であり、宝物であり、誇りであるはずなのですが、詩に関わってきた我々がこのことの重要性と、前橋における詩の特異性を前橋の人たちに語ってこなかったことが、子供たちを詩の音痴にしてしまったのではないかと思います。

萩原朔太郎は日本一の詩人ですが、中原中也や宮沢賢治ほどの人気はありません。それは仕方ないこととして、このふたりには、おらが中也、おらが賢治、といった地元市民の熱烈な応援がありました。朔太郎はどうでしょうか。朔太郎を応援している前橋文学館はありますが、その前橋文学館に関心のある人は、ほんの一握りの人たちで、多くの前橋市民は朔太郎にも詩にもあまり関心がないように思いました。それに朔太郎最中や朔太郎饅頭といったようなものは古くからありま

したが、それ以上の応援はなかったように思えます。

先日、三〇年ぶりに前橋を訪れた知人が、「古い建物はみんな壊されて昔を偲ぶものがなかった」といって、寂しがつていましたが、私も彼と同じ気持ちでした。しかし、前橋には昔を偲ぶには十分すぎる日本一の利根川があります。この利根川で朔太郎は沢山の詩を作っています。前橋には故郷を懐かしむような建造物はありませんが、利根川の水の流れは変わっても、利根川の姿そのものは千年前の姿を止めています。これからも前橋の街の姿は変わり続けると思いますが、利根川は千年先も変わることはないと思います。そこで、私が思ったのは、群馬の人や前橋の人たちは利根川を自分たちの故郷として、この美しい景色を見守っていったらいいと思います。

そして、この広報活動を一過性のものとして終わらせないためにも、朔太郎のこと、群馬における詩のことが永遠に語り継がれる仕組みを作ることだと思いました。すべては、群馬から、そして前橋から詩を絶やさないためです。

朔太郎もこのことには大変、心を痛めていて、いずれ詩が作られなくなるのではないかと心配されていたむきの文章を残しています。詩に無関心のいまが、そのときだと思えました。

このようなことにならないために、朔太郎のこと、そして前橋における詩のことを後継者となるべき子供たちに伝えなければなりません。

せんが、そのためには、それを伝える場所と仕組みが必要だと思いました。

そして、毎日生徒に接している先生方に、朔太郎のこと、詩のことを生徒たちに語ってもらうことが、生徒たちの詩の創作意欲を掻き立てる原動力になると思いました。それに、私も子供たちに直接会って、この話をしたいと思います。

詩に託したもの

追悼——くぼたこうじさん

富沢 智

くぼたこうじさんは、『榛名団』創刊号(二〇一一年十一月発行)から、不慮の死を遂げる前の十一号(二〇一四年六月発行)まで、欠かさず参加してくれていた。八月六日死去。享年七十六歳。おおよその経過は他所に書いた。ここでは、若干の補足と、主に詩作品に寄り添って書いてみたい。

九月二十一日付けの『上毛詩壇』(曾根ヨシ選)に、くぼたさんについての作品と、評が載っていると教えてくれたのは、Yさんという、いまは終了した『まほろば詩作教室』の生徒さんだった。

この教室は、村の生涯学習講座の一環としてスタートし、その後自主講座として、二〇〇七年一〇月には、六周年記念詩集『ぶりきの風船』を出していた。メンバー五人は全て女性で、その中にくぼたさんと同期の方の奥様がいた。そんな縁で、くぼたさんは教

室の見学に訪れたのだった。このときが初対面だったのか、その前に挨拶を済ませていたのだったか、記憶は定かではない。窪田幸司・小詩集『夕焼けの空』の発行日は、二〇〇六年四月。久保田穰さんに師事し、詩の社会性を見据えていたくぼたさんにとって、教室の内容は物足りなく映ったのかも知れない。また、地域の文化教室特有の雰囲気もあって、くぼたさんは、教室には入らず、その後、足繁く「まほろば」へ通って来るようになった。くぼたさんを紹介してくれたKさんの旦那さんとは、県警の同期ということで、元警察官としてのくぼたさんの印象が強かったが、この間の取材で、実際は様々な職業を経験した苦勞人であることが分かった。

『上毛詩壇』の投稿作品は「一枚のハガキ」中竹綾夫。／群馬箕輪局／消印は(昭和)二十九年四月二十日／住所が／群馬県立経営伝習農場となっている／と、始まる。ここには十七歳の窪田幸司さんがいた。現県立農林大学校、私などの年代では農民道場と呼ばれ、相馬ヶ原に隣接した隣の親しい学校である。ここを振り出しに、自衛官、警察官、民間会社営業マン、喫茶店経営、警備会社経営と送った人生は、同じように職歴を重ねてきた私にとっては、納得し、共感を覚える生き方だ。くぼたさんの作品に寄り添うことにする。『榛名団』に寄せた作品をテーマ別に分けると、創刊号の「沖繩の丘よ」を皮切りに、沖繩をテーマにした作品が最多の五篇(一、六、八、十、十一号)。次いで、「警戒地域拡大」

(二、七、九号)など、三・一一東日本大震災の原発事故関連が三篇。「ボク山よ」(三三号)は、北九州・田川の炭坑地帯。「赤城大沼用水路」(五号)は、生まれ育った富士見地区。そして、「梅雨時の溜め息」(四号)は、最後の仕事となった警備会社の一場面。「はじめての病室」(四号)は、自身の持病についてだ。

この出稿傾向をみると、くぼたさんが、詩の社会的な意義に思いを寄せていたことが分かる。そして、それはイデオロギー的な立場というより、青年前期のピュアな社会正義的な志によっているのではないかと思われる。そう、思い至ったとき、自衛隊員、警察官という経歴と、詩人、くぼたこうじさんの存在は矛盾しなくなった。

沖繩は、くぼたさんにとっては、嫁いだ娘さんの生活の場として、北九州・田川は奥さんの実家として、いずれも人生の途上に囚らざるも遭遇した地であって、積極的なテーマとして現れた地ではない。

そのうえで、「詩にながでできるか」と、問わなければならない。くぼたさん、あなたの追悼文はこれが三本目です。喫茶店『アン』に由来する「雷神橋」、遺稿から「まだ病院」を紹介しました。そして、ここでは「梅雨時の溜め息」の一連を紹介して、お別れします。さようなら。

／梅雨の時期／雨降りの日がつづく／屋外に／仕事の場を求めている会社にとっては／現場は休みになり／会社の売り上げはゼロになる……／。

詩集評

富沢智詩集『乳茸狩り』

哀しみの向こうに

堤 美代

詩集『乳茸狩り』は、不思議な哀しみの漂う詩集である。

「颯爽と」

／あつ／言葉なんて／偽善だな／あそこで
お別れだ／キミとボク／ウジ虫だったなん
て／言うな／言わないよ」

人が日々の暮しの中で生きる時、圧倒的な現実の前で言葉を失い、絶句する他はない出来事に出会う。「人は悲しみに支えられていき
ているのだ」とは誰の謂いであったか。シニカルで自嘲を含んだ自己否定が、胸の内の深い空虚を連想させる。裏返せば、詩というものが、自己の存在を受容し赦してくれる、唯一の証でもあるのだろう。「夏の日
の空に吸い上げられていった」少年の日から、作者は、常に、背に青い空の微光を負っている。

「地面の底」

／小さな蠟燭の灯は揺れ／地面の底から振り
仰ぐ地上は／二度と戻れないような丸い小さな空／足元には何があるのか／何が居るのか
／竹の根がびっしりと／息をひそめているのを見た」

藪の中で息をひそめて竹の根をみつめている少年は、萩原朔太郎のように、地面のなかにあらわれるさびしい顔をみたのではないか。

暗い穴の中で細く伸びてゆく竹の根は、母の胎内の羊水に浮かぶ赤子の臍の緒ではなかったか。計らずもこの世に生まれ出てしまったあて途なさ。少年のやわらかく傷つきやすい繊細な魂が、細い竹の根のように、地面を探ぐって、おぼおぼと詩の言葉を吐かせているのだ。

「この先 ぬけられます」

／躓いているのは確かだ／たたらを踏んで／
このまま どうする／たつて／たつて／
／しかないのだ」

「鳴く虫」

／あなたもわたしも／蛍の時があつたんだと
思う／お尻を光らせながら／思い切り鳴きた
かった時が」

自分では制しきれない無意識の底から言葉が湧いてくる。比喩とかイロニイとかでは括りきれない哀しみとおかしみを伴って、詩がこの世とあの世を往き来する。誰にもとり戻せぬ時間と空間の外に引っぱり出される。

作者は、まるで、山神に呪詞を奉告する男巫子のように、まじないの詞を吐くのである。捕え難い呪詞の数々、「水の中で／光るもの
には／さわるな」と言いつつ、さわらずには
いらぬ人の世の無常と、現代の終末の予感
を謳う。初々しい少年の傷つきやすい純粋
と、魔性を持つ少女の無垢を合せ持った両性
具有の森番は、榛名山の山里で、この世と異
界を繋ぐ役目を負って、死者を葬い折りを捧
げ、永遠と真理が常に表裏一体であることを、
詩集『乳茸狩り』によって伝えてくれている
のである。

斎藤守弘詩集

『戦争放棄』の光芒を見る

磯貝優子

胸に持っている小粒の石を投げようという
思いで、〈社会 現実／変革〉の叢書の一冊
としてこの詩集は出版された。一閃の光芒を
延ばすことの中で産み出されている。

一九八二年の「未明」と今年の「ヨルダン
川の垂象」を読んでも、永年にわたり武器を
持たない人々に心を痛めてきたことがわかる。
言葉があれば人命を尊重する心が伝わりとの
強い思いは、人間が抱える声の大きさと心の
像を、その現実を、言葉の勤しみ方の仕事を
さしだすという意識をもとに文辞をかわして
きたと言う。謙虚な詩精神のように思う。

だが、作品には、直接的な言葉は少ない。
五十年前から学んできたソシユール論考、そ
れを発展させたフランスの思想家・記号学者
の論理による表現体を具現化している。人間
性に根ざす主題の設定は明確で、読むことそ
のものに興味は増すが何分にも難解である。

表徴を用いての言語と思考の呈示。「駅」
という文字、音声は感覚的側面を言い、意味
内容は裏に秘められている。従って、文字は
史実を隠している。「私」自身が見ていたのは
新聞の活字。戦中に軍が関与した慰安婦問題。
「私」は住む街の実在の駅に下車するが、「い
つもの通り／繁りすぎた櫻の枝葉におおわれ

「た」街の駅は何の意味も持たない。「見上げると駅の名は慰安婦と書かれていた」とある。混沌とした脳裏の中か、何処かの奥底の対比、文字と画像の刃を向け合っている迫切にふるえ、見上げた一瞬、単なる言葉として読みとおせるものでない表現体がそこにあり、読み手は史実の思考の過程を辿ることになる。

「私の庭に羽黒が跳ぶと私の家族の出来事は／次の夏の日が現実になります」

ハグロトンボといえば、翅が黒いので言うが、私によって名づけられものは家族のことを前ぶれする本能を持つ。その前ぶれとは、無に率いられた今という瞬間を消すというものである。母は昨年そこにいた。無のみに。今年の夏が現実であることは、永劫、真理、生命、何もかも言葉は無であることでわかる。八年前からのこととして悟ったことが、言葉の無化作用をおこなう。意味されるものを持たない表徴がつくる表現体は、一種の悟りなのだ。それだ。「それでいて／羽黒にはなんの罪もない／炎陽のみちをできるだけ多く日陰をつくるように翔舞しています」。描かれなければ存在しない世界がそこにある。もう一つの世界を示すのが表現体と考えられる。

「二〇〇九年五月が来たたら」、「九人称複数形」、「霧瘴」、「再帰代名詞」など、プロセスそのものを読み取る行為を実践する意味を感じる。強固で逞しい、内部的な文学実践のエネルギーそのものの詩精神は一篇一篇進化している作品を展開している。

「裳」―耳で味わう詩― 相乗り朗読会を終えて

須田芳枝

詩誌「裳」同人で表紙絵を担当し、版画家としても活躍中である小林三恵さんが「megu / mie それぞれの翼」展をフリッツ・アートセンター（前橋市敷島町）で開催した。8月1日〜24日までの会期中の各土曜日、イベントを組み、その一環として9日「耳で味わう詩―詩人による自作詩の朗読」会が開かれた。「裳」の同人が主として朗読をするのは初めての試みであった。様々な事情で金井治子・四宮朋・曽根ヨシ・房内はるみ・真下宏子・小林三恵・そして私の七名が参加した。



また詩人クラブ会員の新井隆人さんの協力を得て、彼が代表を務める文化活動団体「芽部」のお仲間が、朗読の際に楽器演奏を担当してくれているという、驚きのサプライズがあった。単純な私は「一人で舞台に立つより誰かが隣に居て

くれた方がならないかも」と早速ピアノを予約した。各々が自分の作品と相談しながら民族楽器の口琴や、リズム楽器の奏者と事前音合わせ。音合わせとはいっても自作詩にちよつと目を通して貰うだけの、ぶつつけ本番といった一時間半がスタートした。

中盤ゲストの浅見恵子さんが専属？サククス奏者と共に息の合った朗読の醍醐味を披露。間よく楽器独奏が入り、雰囲気や和むと同時に緊張感もほぐれ、耳慣れない口琴の音色等に聞き入った。いよいよ終盤に入り、司会進行役も担当してくれた新井さんと、奏者が織り成す絶妙な世界へ誘われる。その圧巻のハーモニーにはとうてい及ばないが、初めてとは思えない音と朗読の調の中、夏の夕べは滞りなく幕を閉じた。

今回の朗読会は「裳」の自発的な発案ではなく、小林さん親子の二人展に誘われる形で始まり、その過程で様々な提案に尻込みをせずに参加の手を上げる事で実現した相乗り朗読会ではあった。しかし各自が持ち寄った詩を通して得た経験は会が終わった後の、小さなパーティーでのそれぞれの顔の輝きを見れば成果があった事は一目瞭然であった。

詩を書く事は極めて個人的で孤独な作業だけれど詩が特別な訳ではなく他の芸術も同じだと思ふ。開かれた詩の朗読会という座席に座り、聞き手であり、書き手であり、読み手でありながら詩の窓を少し開かれたものにしてゆく必要性を感じた貴重なひと時であった。

二〇一四年

『群馬年刊詩集第二十七集』

販売のご案内

群馬詩人クラブ刊行『群馬年刊詩集第三十七集』を次の要領で販売します。

内容

詩作品 六十七篇

追悼 窪田幸司

文・「追悼」

くぼたこうじさん

律儀な詩人」

富沢 智

表紙装画 長岡壮三

発行

〒370-3102

群馬県高崎市箕郷町

生原一七三〇龍生寺

平野秀哉方

群馬詩人クラブ幹事会

印刷 三協印刷

頒布 二〇〇〇円 会員は一〇〇〇円

いずれも郵送費は別料金となります。

※問い合わせおよび購入希望は幹事会へご連絡ください。

(☎〇二七-三七一一三四七二)

受贈詩誌御礼

*御惠贈感謝いたします。

療3

福井県詩人懇話会会報86

季刊詩誌 詩的現代10

中日詩人会会報181

秋田県現代詩人協会会報50

日本現代詩人会報135

静岡県詩人122

いわての詩2014

北海道詩人協会会報137

詩集 昭和八十八

群馬県における近・現代詩

文芸祭現代詩大会

年間詩集ふくい2014

福井県詩人懇話会会報87

日本詩人クラブ広報68

河 第二期32

山梨県詩人会会報14

裸心版

日本現代詩人会国際交流セミナー

北海道詩集61 2014年版

北海道詩人協会

長野県詩人協会会報127

詩集 水の花

榛名団12

秋本カズ子

榛名まほろば

十月二十二日現在

敬称略

柳沢幸雄

編集後記

秋は、おだやかに深まりゆくからここのちよいのだろうが、それにしても、ことは何かとさわがしい。御嶽山の噴火といい、二週連続して列島を縦断した台風といい、自然の驚異をまざまざと見せつけられて。

それでもやはり、秋は「芸術の秋」なのである。

この時期、県内でもたくさんの絵画展などが開催されている。興味をおぼえた催しには、時間がゆるせば、すこし遠くても出かけるようにしている。そして、作品を鑑賞しながら、それが、よくわからなくても、未知のそうした時間・空間につつまれている瞬間がたまたまなく好きなのである。そこに「詩的」なものがすこしでも感ぜられれば、言うことなしである。

本会の「現代詩作品展」には、三度出かけてみた。さいわいというか、ちょうど会場には人が少なく、ゆっくり、じっくり時間をかけてそれぞれの作品を鑑賞することができた。立体であったり、実験的であったり、ウィットに富んだ奇抜なものであったり、自在な発想力に感心することしきり。出品された方々に感謝。次回は来年六月開催予定。

(三枝治)

訃報のご連絡

本会の会員 宮崎清さんが9月27日にお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。